

未来にツケを残さないために

高レベル処分法の枠組みを作った高レベル処分問題懇談会の席上で、電気事業連合会会長であった荒木浩東電社長（当時）は「原子力を始めた当初は、（高レベル廃棄物は）一生使っても豆粒一つぐらいと思っていた。」「電気事業者でありながら、こんなに大変な問題であることを初めて知った。」と本音を漏らしました。

高レベル廃棄物の問題は、トイレなきマンションと言われ続けてきた原発のアキレス腱です。百万年間に上も管理が必要な廃棄物を生み出して将来にツケを残しながら、原発による電気を享受することは、世代間の公平性に反します。

かつて日本は、垂れ流しによる産業公害に苦しみましたが、排水・排ガス処理という対症療法から、水銀

などの原因物質を使わない製造法への転換と対策を進展させることで克服の道を歩きました。この教訓を原子力に当てはめると、危険な高レベル廃棄物の処分を無理やり押し進めるのではなく、再処理を止め、危険な廃棄物を生み出し続ける原発を止めることが必要であることは容易に理解できます。核燃料サイクルの中でまったくめどのついていない高レベル処分場の建設を許さないことが、核燃料サイクルを断ち切り、再処理と原発を止めることにつながるはずです。

また、疲弊した地方に危険な処分場を押し付けようとする国の政策は、都市と地方の格差問題の縮図です。高レベル廃棄物処分場の問題では、持続可能な社会のあり方や民主主義そのものが問われているのです。

一日でも早く原子力政策を転換することができるように、ともに声をあげていきましょう。